様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年４月３０日現在

機関番号：32670
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22720050
研究課題名（和文）絵巻にみる様式の「継承」と「伝統」の創出に関する研究
研究課題名（英文）A study on the Inheritance of the style and the Creation of “Tradition” in handscroll paintings.

研究代表者
水野　僚子　（MIZUUNO RYOKO）
日本女子大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：30469209

研究成果の概要（和文）：
中世から近世の絵巻（模本も含む)を対象に、イメージの「型」とその継承のありようを明らかにするために、モティーフや画風に着目した画像データベースの構築を行った。その結果、時代や主題、絵師（工房）にかかわらず、断続的にイメージの「型」の継承が見られた。これらはイメージの直接的な参照・引用関係を示すというよりも、各時代の制作者が絵巻を権威づけるための「型」として受容したものであり、「伝統」に対する彼らの文化的価値観を示すものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：
In order to clarify the successional aspects of image “types”, a database of images divided into motifs and painting styles was constructed using handscroll paintings (including copies) from the middle ages to modern times as the subject. The result was that a continuous succession of image “types” was seen, regardless of period, theme, or artist (school). Rather than indicating direct copying of images, it can be said that the producers were receptive to a “type” which gave authority to the handscroll paintings, and shows their cultural values toward “tradition”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：絵巻、継承、伝統、美術史

１．研究開始当初の背景

1970 年代末から 90 年代半にかけて、全巻のカラー図版を伴う絵巻の全集が刊行されたことにより、美術史のみならず、文学、歴史、民俗、宗教など隣接諸学による絵巻研究が進展してきた。特に近年の研究では、絵巻の制作意図や享受に関する関心が高く、平安時代にはつくり物語や説話が、鎌倉時代以降はさらに神仏や高僧の霊験譚が、「絵巻」という形態によって、聖俗の権力と結びつき、

政治に有効な文物として世に輩出されたことが指摘されている。権力や財力を持った絵巻の制作者たちが抱いていた文化的価値観を理解するためには、絵巻という形態が担う意味や機能を考察するとともに、絵巻に描かれたイメージの「型」とその継承のありようを、共時的・通時的に検討することが必要であると考えた。

また、本研究の着想の背景には、科学研究費助成研究「「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究―日本中世の文学・絵巻から―」（基盤研究（B)、研究代表者：池田忍）がある。美術史と中世文学の研究者による共同研究によって、視覚的イメージの生成と伝播が、文学と不可分の関係にあるということ、中世絵巻に描かれた多様な「場」を「型」として捉え、共時・通時的な関係性を探るという視点やこのような方法論の意義を学んだ。本研究はこのような視点や方法を継承しつつ、「場」を構成するモティーフや様式といった細部の表現における「型」に注目史分析を行うこと、また中世のみならず近世の絵巻や模本や粉本等の副次的な制作物にまで分析の対象を広げ、イメージの「型」の継承の意味や機能を考察することとした。またイメージの「型」の継承という行為が、作品制作という行為の中でどのような意味や機能を担うのか考察すべくつとめた。

２．研究の目的

本研究の目的は、中世から近世にかけて制作された年代の異なる絵巻の「描写」そのものに注目し、時代・絵師・工房を超えた「継承」のありようを分析し、原本の有無や転写本の可能性を検討するとともに、「継承」の意味やその行為をめぐる「人」や「場」のネットワークを解明することである。

従来個別の絵巻研究において、「古様」の問題が指摘されるものの、制作年代の解明とは直接関わらないことから、継承された図様や画風の具体的検討や継承の「意味」に関しては、さほど問題とされてこなかった。しかし中世から近世にかけて制作された絵巻には、当世風の描写がなされる一方で、建築・庭・草木・雲霞・神仏・人物等の描写に前代の絵巻、また掛幅・仏画等の描写に類似する表現が確認できる。これは手本となる粉本や原本が存在していたことを示すのみならず、作品自体が「転写本」である可能性、つまりそれ以前に遡る「原本」の存在をも示唆する重要な問題といえる。また、このような類似の表現は、一つの「型」として継承されたことを示しており、その「型」は、「伝統」の表象として享受されていたと考えられる。そこで本研究は、イメージの「型」とその「継承」のあり方に注目し、イメージの参照・引用関係を共時・通時的に考察する。また、文学や文献史料等様々な資料を活用しながら、モティーフや「型」として示されたイメージの意味を考察し、作品制作やイメージの享受の情況を検討するとともに、絵巻そのものの意義を明らかにすることを目指した。

数多くの絵画の中で絵巻に焦点を絞るのは、制作年代や絵師に関する基準作や史料が比較的多いことはもとより、画面そのもの中に絵画制作の状況を窺い知ることのできる情報が豊富に存在するためである。いうまでもなく、絵巻が内包する物語や、文字で表された詞書には、モティーフや図様の意味理解のための多様な情報が含まれているからである。

３．研究の方法

研究を進めるに際し採用した方法は、以下の二つに大きく分けられる。

第一に、本研究では、描かれた時代、主題や形態といった、作品を規定する枠組みを一旦取り払い、図様やモティーフ、彩色技法といった細部表現のレベルにおいて比較検討を行うため、データの蓄積を図り、画像データベースの構築を行うことである。第二に、作品の表現を詳細に検討し、細部に込められた制作者の関心や意図を探るための作品調査である。江戸時代末に制作された模本や粉本類の調査も行った。なお、作品の熟覧、画像資料の閲覧に関しては、所蔵者や所蔵機関の協力を得た。これらを通して、図様や様式等の類似・転写関係を分析し、前代の絵巻から継承されたと思われるイメージの「型」を抽出した。さらにその意味や機能を、文献資料や文学等を用いて考察し、作品と制作の歴史的意義を探った。

一方、「絵巻」を通して、後世の人々が過去の「文化」へ向けた眼差しを明らかにし、あるイメージを共有することが文化的にどのような意味を持つものであるのか解明するために、絵巻以外の作品も対象とし、「型」の継承のありようを検討した。

４．研究成果

本研究の最大の成果は、中世から近世の絵巻のデータを総合的に蓄積したデータベースの構築ができたことである。データベースは図像や描写の類似関係を分析・検討するための画像データを柱とし、詞書や文献資料から得た文字情報も付加する形をとった。データベースの作成に際しては、まず樹木・草花・建築・河川・神仏・雲霞・人物・動物など主要なモティーフに分類し、画像データを蓄積するとともに、図像の転写・転用などの影響関係を検討した。一方、画風や様式の継承の様相を検討するため、人物・草木・土坡・霞・雲・山・岩・水・火・建物等の細部描写について、彩色の技法や顔料、金銀泥箔・雲

母の使用状況に関しても文字データとしてデータベースに反映させた。画像データベースは本研究の根幹をなすものであり、構築には多くの時間を要したが、現在約 1000 件の画像データを擁するデータベースを構築することができた。ただし、本データベースは絵巻の本画からのみデータを抽出し構成したものであり、今後は模本類のデータも随時追加していく必要がある。

「型」の継承に関して注目できるのは、鎌倉期の絵巻の図様や様式が時代を超えて継承されていることである。例えば「一遍聖絵」や「法然上人絵伝」に見られるような、霞や雲の形態や景物の描写、精緻な建物の描写などは、江戸時代に至るまで類似の表現が見られる。平安時代の絵巻の様式は、幕末の絵巻において土坡や霞等の表現に類似の表現が見られるまで、その間に制作された絵巻には見られないことから、鎌倉期の絵巻の表現様式が、やまと絵系絵巻の描写のスタンダードとなり、それが「型」として継承されていたことがうかがわれる。平安時代の様式は、鎌倉時代の絵巻に吸収されるかたちで一旦は途絶えてしまうのに対し、特に鎌倉時代を代表する絵師であり絵所預も務めた高階隆兼の様式は、時代を超えて広く継承されている。細部の描写は各々異なるものの、「春日権現験記絵」に見られるような、幹の細い松を交差させる表現、幹や枝を湾曲させ葉叢を垂下させる樹木の表現、遠方の山を覆う樹木の様子、貴族邸を描く際の精緻な建築描写、異国における角張った岩の表現、精彩な色彩、人物の表情といったモティーフの描き方が、絵巻の主題、時代を超えて継承されていることは注目できる。これらのモティーフ（および描き方）は、絵巻を描く際の「型」として継承されたものと考えられるからである。このような「型」の継承は、室町期の将軍周辺で制作された絵巻や、江戸末期の絵師達による絵巻に顕著に見られることから、やまと絵の正統的な「型」として受容されていたと考えられる。既に指摘されているように、室町将軍が制作した「誉田宗廟縁起絵巻」は「春日権現験記絵」という古典の再生という意味を担っていたこと、江戸末期の絵師達が画派を超えてこぞって「春日権現験記」の模本を制作していることを考え併せると、鎌倉時代に成立した隆兼様式は、古典的「型」としてカノン化され、「伝統」の表象として様々な絵巻の中に引用されているといえよう。そこには「伝統」の「型」を継承することによって、絵巻に正統性をもたせ、権威づけるという意味や機能があったものと思われる。

第二の成果は、国内および海外において、多くの絵巻作品および模本類の調査が実施できたことである。

海外調査は、アメリカ NY にて行い、メトロポリタン美術館、バーク財団、ニューヨーク市公共図書館、個人所蔵の絵巻類、絵本類の熟覧および写真撮影を行った。特に中世から近世に制作された御伽草子系絵巻、白描系物語絵巻を中心に、熟覧および画像・資料収集が実施できたことは大きな 成果であった。また歌合絵巻の調査が出来たことも意義深い。膨大な類品のある歌合絵は、人物像の類型化や継承に関する諸問 題を考える上で示唆的であった。

国内では、金刀比羅宮や個人所蔵の、冷泉為恭や田中訥言など、いわゆる復古大和絵師と称される絵師たちによる古絵巻の摸写や粉本の調査が実施出来たことが大きな成果となった。膨大な 摸写類は、物語、高僧伝、社寺縁起、記録系絵巻等ジャンルは多岐にわたり、また原本の絵師の画系も様々であり、彼らの関心、つまり彼らが「古典」とみなしたものが、特定の時代や画題と結びつかないことが理解できた。特に冷泉為恭に関しては、これまで王朝への回帰や憧憬という面が強調されてきたが、古絵巻の摸写を見る限りでは、物語絵巻のみならず高僧伝や社寺縁起、記録系絵巻に至る様々なジャンルの絵巻を写し、その図像や様式を習得しようとしていたことがわかった。また同じ絵巻の摸写を繰り返し行い、しかも白描と著色画の双方の形で摸写制作が行っていることは注目に値する。為恭は、「法然上人絵伝」48 巻を三度も臨写しており、このことからも図像や画風だけでなく配色や彩色方法までも体得しようとしていたと考えられる。しかしこのような模写制作は、二次的作品の創 出でもあったと考えられる。それはまさに典拠のある「古典」に基づいた新たな「伝統」の創出であり、それによって自らを正統な絵師 に位置づける行為であったと考えられる。

このような為恭の姿勢は、障壁画の制作からも感じられる。大樹寺（岡崎市）の上段・下段には、あたかも絵巻を大画面に拡大したような、パノラミックで極彩色のやまと絵が為恭によって描かれている。土坡の表現には、「信貴山縁起絵巻」の模写によって習得した表現が使われており、濃彩の鮮やかな色彩、交差する松、小松の表現などは、「春日権現験記絵」に近似している。つまり上段下段の障壁画は、平安時代および鎌倉時代の古絵巻のイメージの「型」を引用し、古典的イメージによって新たに作り上げた画面であるといえる。このような画面は、為恭が「伝統」を継承した絵師であることを視覚的に示すものであった。他の部屋には自らの出自である狩野派の粉本を用いた画面を描き出し、目録の署名にも狩野派の絵師であることを明示する一方で、最も格の高い上下段に古典的な主題を、伝統的な様式をもって描き出していることは、狩野派という当世の画風と、古

典的つまり伝統的な画技の双方を身につけていることを、視覚的に顕示しようとしたものと思われる。為恭にとって、古絵巻から習得し、新たに創出した「伝統」のイメージは、絵師としての自らの正統性を保証するものとして機能していたと考えられる。

このように、画像データベースによって抽出される様々なイメージの「型」は、絵巻以外の絵画研究にも応用可能である。「西浜御殿舞楽之図」に関しては、絵巻に度々描かれた貴族邸の庭の情景の「型」が引用され、しかも「舞楽」という行為と結びつくことによって古典的で雅な空間を創出していることを論文において報告した。また、源氏絵や伊勢絵に関しては、新たに又兵衛派の作品の調査を実施し、比較検討によって得られた新たな解釈を論文で発表した。

なお調査した絵巻の個別の研究成果については、随時発表していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①水野僚子、「「西浜御殿舞楽之図」にみる雅楽の表象―徳川治宝における雅楽の意味と機能」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 166 集、81-104 頁、2011 年、査読有
②水野僚子、「「光明真言功徳絵巻」をよむ―男女の表象と「場」の設定に注目して―」、『「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究―日本中世の文学・絵巻から―（科学研究費基盤研究Ｂ報告書：課題番号 19320022）』、73-83 頁（付表 154-160 頁）、2011 年、査読無
③水野僚子、「「一遍聖絵」にみる〈理想〉と〈現実〉」、WEB 東海（東海大学出版会）『シーシュポスの人間学―〈理想〉と〈現実〉のはざまで―』第 5 回（全 12 回）、2010 年、1-6 頁、査読無、掲載は下記 URL
http://www.press.tokai.ac.jp/webtokai/sisyphus_05.pdf

〔図書〕（計３件）
①三田村雅子・河添房江編、水野僚子、他『源氏物語をいま読み解く４　天変地異と源氏物語』、翰林書房、2014 年、267 頁の内、担当 171-203 頁
②国立歴史民俗博物館編、水野僚子、他『楽器は語る―紀州藩主徳川治宝と君子の楽』、国立歴史民俗博物館、2013 年、163 頁の内、担当 137-141 頁
③小林忠先生古稀記念会編、水野僚子、他『豊穣の日本美術―小林忠先生古稀記念論集』、藝華書院、2012 年、581 頁の内、担当 306-311 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
水野　僚子（MIZUNO　RYOKO）
日本女子大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：30469209

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし